たまむしの森

―谷川士清の会会報―　第2号

発行年月日
平成13年3月30日
発行者　谷川士清の会
代　表　増田　孝
題　字　若林信香

夢追い人・旧宅へ

―東海テレビの放映について―

昨年十一月四日と六日の両日にわたり、谷川士清について東海テレビの取材があり、同月三十日午後「夢追い人…浪漫紀行…偉人発見旅」というタイトルで谷川士清と松浦武四郎が取り上げられました。ことに谷川士清については、最初に近藤市長がご多忙の処をご出席頂き、当日のリポーター・音楽界で世界的に有名な小室等さんと士清旧宅の裏庭で対談され、市長から士清の人となりについて「士清さんは著名な医者であり高名な学者であったが、津の藩主からの強い要請を断り、生涯仕官することなく、市井に生きる人として強い意志をもって、己を貫いた人物であった」という鋭い見方を述べて頂きました。また会員の有志が旧宅の座敷で三ツ村顧問より士清について講義を受けている情景も取り上げられ、会員とリポーター役の小室さん・白井貴子さん（フォーク歌手）との対談も紹介されました。その後お二人は谷川神社、反古塚、士清の墓を廻られその映像により、会としてまたとないＰＲの機会を与えられ、広く士清さんを県外に発信することが出来ました。終りに、この度の放映はご尊父が戦後津市復興の功労者であった、志田東海テレビ支局長と谷岡経津子顧問との大変なご尽力のお陰であり、会員と共に深く感謝の意を表します。　（代表　増田　孝）

小室等さん、白井貴子さんとの対談

士清さんの偉業と宣長との親交

谷川士清翁は宝永６年、今を去る292年前、現津市八町に生れる。家は北畠氏の流れを受け、祖父の代より医を業とし、殊に父義章は名医で聞こえ「恒徳堂」の前には客足が続いたという。佐藤義故は「阿漕雲雀」に里山の狸狐が人に化けて診察を乞いに来たとその繁盛ぶりを語る。士清は学識の深い父と菩提寺福蔵寺の高僧洪天和尚の指導の下に儒学を学び12歳時に既に漢方医の基礎文献「素問」「霊枢」を読破している。21歳の時京都に遊学し、儒学・本草学を松岡玄達に学び、神道は松岡忠良及びその師玉木葦斎（いさい）に学び、神道許状を受けている。

一方、医学は折衷派の西日本の権威福井丹波守に師事して医師免許を授かった。士清の５年間の遊学は万葉集その他多くの典籍を渉猟すると共に、幅広い先見の士等との交遊がその重みを加えている。

帰郷後は、父を助けて医業に携わる傍ら、神道・国学の塾を開き、伊勢を初め中国九州からの門人を指導した。而も前人未到の驚異的な業績を残した翁の超人的な存在には唯々頭を垂れるのみ。「日本書紀通証」同付録「和語通音」・「和訓栞（わくんのしおり）」いずれも斯界の嚆矢（こうし）となった歴史的な著作で後世に多大な影響を与えた。「日本書紀通証」は宣長の「古事記伝」への取り組みの促進剤となり、その付録「和語通音」は在京中の宣長を賞賛させたが、その不備（ヲ・オの位置づけ）は後日宣長の「字音仮字用格」によって修正された。「和訓栞」と「古事記伝」は相前後して編述に入ったようだが、この頃から二人の交渉が頻度を増し、相互扶助する場面が其の書翰から伺われ、質疑応答、資料の紹介・賃借、原稿の交流等が紳士的に行われていた。奇しくも伊勢の国に生まれた二人の美しい友愛で厳しい学問に挑んだ姿、そして祖先の遺業を継承して苦節百年、「和訓栞」に明治の光を当てた谷川家の執念と崇祖の心に、深い敬意と郷土人としての誇りを覚えるのである。

（顧問　三ツ村健吉）